

語られざる海軍造船官の記憶：九州帝国大学教授野 中季雄について

本山， 聡毅
熊本学園大学

<https://doi.org/10.15017/4254>

出版情報：エネルギー史研究：石炭を中心として. 22, pp.115-142, 2007-03-27. 九州大学附属図書館
付設記録資料館産業経済資料部門
バージョン：published
権利関係：



【資料紹介】 語られざる海軍造船官の記憶

——九州帝国大学教授野中季雄について——

本 山 聡 毅

解 題

本稿は明治後期から大正期にかけて海軍の技術部門で功績を残した、野中季雄造船武官について紹介を行なう。野中は二十五年にわたる海軍での奉職を一九二三（大正十二）年に予備役で退いた後、翌一九二四（大正十三）年一月に九州帝国大学工学部造船学科に教授として赴任し、第二講座（艦艇設計、艦装）を担当した。平賀譲は海軍での主要経歴において野中より三年ほど後進になる。そして平賀に関する近年の研究は畑野勇氏の『近代日本の軍産学複合体——海軍・重工業界・大学』（二〇〇五年）が詳細を極めており、東京帝大の総長まで務めた平賀が「近代日本の軍産学複合体を一身に体現した人物」と評されている。^①野中も平賀も東京帝国大学工科大学造船学科の在学中に海軍の委託学生となり、卒業後は海軍造船中技士（後の海軍造船中尉）に任官^②、その後イギリス留学も経験した当時のエリートであった。そして平賀は主に設計畑で業績を築き上げ、そのため「構造強度・工作現場の重要性の認識が薄く、

知識が十分であったとはいえなかった」との批判がある。^③これに対して野中は現場工程の重要性をよく認識しており、本来は設計専門の造船官でありながら、呉海軍工廠の造船部長という要職を九年間にわたって務め、また九州帝大で教鞭をとってからは、学生たちに現場の重要性を語りつづけた。平賀と比較した場合、この点に野中の独自性があり、西島亮二や真藤恒も彼の教えを受けた学生であった。

西島亮二は戦時期に合理的な造船工程管理手法を独自に開発した海軍造船武官であり、彼の開発した工数管理は「西島カーブ」として知られるようになった。だが戦後は民間造船企業からの招聘を断り、「信和工業」という小さな会社を営みはするものの「半ば浪人暮らし」を送り、一九九六（平成八）年に死去した。^④また真藤恒は戦時中に西島の鞆持ちの役回りを務め、戦後は造船の生産管理の根本的改善と発展に大きく貢献した。寺谷武明氏による先行研究「NBC呉造船所の設立——真藤恒を中心として」^⑤でも分析されているとおり、西島の手法を受け継ぐ真藤は戦後日本の造船業の経営展開にとって大きな役割を果たした。彼は

「NBC呉造船所」や「石川島播磨重工業」で造船工程の合理的な管理運営を推進し、その生産性向上に大きく寄与したのである。真藤はその後土光敏夫の依頼により一九八一（昭和五六）年に「日本電信電話公社」の総裁に就任、民営化への組織改変に功績をあげ一九八五（昭和六〇）年発足の「NTT」の初代会長に就任したが、一九八八年六月に発覚した「リクルート事件」の醜聞が汚点となった。彼は「NTT」会長を辞任し翌年に逮捕され、以後は一切の公職から退き二〇〇三（平成一五）年に死去した。毀誉褒貶はあるが、彼の業績は総じていえば振り返るに十分な価値があると考えられよう。

さて今回の野中李雄に関する記録について、戦前の九州帝国大学工学部造船学科で編集され、九大造船会で発行された冊子『吾』の中から野中が話したものの、野中について述べたものを選んだ。第八号（一九二九年一月）に収録された「日本工業の将来と吾人の覚悟」、同第十三号（一九三五年二月）所収の「回顧十年待望×年」、そして同第十四号（一九三六年三月）所収の「九州帝国大学名誉教授海軍造船中將野中先生を迎ふるに當りて、先生の御鴻業の一端を思ふ」を紹介しよう。これらは野中の教育者としての側面をよく物語っており、また三つ目に紹介する『吾』第十四号所収の記述は、野中の海軍時代の業績も簡潔に整理されている。なお、紹介する資料については、脱字空欄の部分もそのまま転載した。また一部止むを得ず現代の文字表記で代用した箇所がある。これらは現在も福岡市西区元岡七四四番地の九州大学伊都キャンパスにある、大学院工学研究院海洋システム工学部門図書室に保管されている（当工学部門事務室はEメールで webmaster@nams.kyushu-u.ac.jp、図書室は電話・FAX共通で〇九二一八〇二一三四四四）。

ただ過去の号でも現物がそのまま残っているものは多くはない。むしろかつて複写された冊子が保管されている分が多い。工学部が箱崎キャンパスから現在地に移る際、梱包して運ばれたこれら冊子は、海洋システム工学部門図書室に保管されたわけである。なお中には目次がない号の複写冊子もあり、その他頁の欠落もまま見られる。初期の号の所蔵状況を整理すれば次表のようになる。現在のところ第一号と一五号は未発掘であり、もしお心当たりのある方がおられれば、ご一報いただけたら幸いである。

以下『吾』冊子について述べると、第三号はタイプ印字の冊子であるが、第四号から六号までは手書きの謄写版印刷、第七号から再びタイプ印字となっている。概略一〇号までは文芸誌的な趣も強くあり、当時の造船科学学生たちの趣味的な嗜好が反映したのかもしれない。しかし一号からは造船に関する技術情報も詳しく紹介する内容へと、次第に変容する様子が窺われる。なおこの『吾』という名前は、第一回卒業生の岩崎正英が提案し、「誌の目的がお互同窓のいつわらぬ自分の姿、又心に感じた事を表現する、其の内容が何であらうと書いた当時の己の何かが、何等かの形で文の中に、又句の中に生きて残る筈であると云ふ考から生れた」もので、「ひびきは弱いが穏やかな而も意味深い『吾』を選んだ次第」で、衆議一決したものだという。当時の考えとして「近頃の綜合雑誌的な内容を更に上回る（？）ものとし専門専門外を問はず論文であれ、小説、小品、翻訳、随筆、詩歌、日記、紀行文、将又情筆何でもかまわれない事とした」という冊子であった。この流れは今も続いている。私がこの『吾』を知ったのは、二〇〇三（平成一五）年に工学部の部門図書室を訪問した際、親切に対応してくださった中武一明教授のご厚

九州帝国大学工学部造船学科（現九州大学工学研究院海洋システム工学部門）編集『吾』所蔵状況整理表

発行年月	図書室所蔵状況		
	所蔵号	複写保管号	欠落号
1921 (大正10) 年			第1号
1922 (大正11) 年	第2号		
1923 (大正12) 年6月		第3号 (目次なし)	
1924 (大正13) 年2月		第4号	
1925 (大正14) 年4月		第5号	
1926 (大正15) 年2月		第6号 (目次なし)	
1928 (昭和3) 年7月		第7号	
1929 (昭和4) 年12月	第8号	第8号	
1931 (昭和6) 年3月		第9号	
1931 (昭和6) 年11月		第10号	
1932 (昭和7) 年12月		第11号	
1934 (昭和9) 年2月	第12号	第12号	
1935 (昭和10) 年2月	第13号	第13号	
1936 (昭和11) 年3月	第14号		
1937 (昭和12) 年			第15号
1938 (昭和13) 年4月	第16号		

注：上記のうち を付したものについて述べると、次のような事情がある。まず第1号については、岩崎正英による回想「『吾』の名の由来について」（第31号 [1956年] 所収）の記述によれば、「大正十年秋ではなかつたかと思ふ」と記されている。

第2号については私が複写を取っておらず、以前に海洋システム工学部門図書室を訪問した際の記憶に基づくものであり、発行月までは記せなかった。

第3号については原稿掲載記事に付記された年月日や、冊子末尾の編集後記的な記述内容から推し量るほかなかつた。

第4号については、冊子末尾頁の「會計報告 雑誌之部」に記された決算日に基づいた。

第5号については佐藤博の戦後の回想、「『吾』1号ができた頃のこと」（第60号 [1985年] 所収）も読み合わせて最も整合性のある経緯をたどると、「第5号は3月の試験の前に編集は片付いたが、刷り上りは4月に入ってしまった」様子である。

第15号は欠落のため、詳細不明。

に日本海軍のために貢献した造船官であった。彼は一九一〇（明治四三）年からイギリスに派遣され、造船主席監督官として「ヴィッカーズ社」のバロウ造船所における巡洋戦艦「金剛」の建造監督に携わった。「金剛」建造はその後の建艦技術独立のための礎石となり、その技術発達における画期をなしたものである。すなわち主力艦（戦艦および巡洋戦艦）の建造において、「大出力タービン機、背負い式砲塔、一四インチ砲など、超下級艦を成り立たせた要素技術」が習得され、「この時期にイギリスから受けた技術的影響は、超下級の設計思想と、関連する要素技術だけでなく、将来の自主的な開発・設計の基盤となる設計技能と経験にまで及んでおり、大艦巨砲主義の道を積極的に指し示す役割を果たした」のである。平賀譲や藤本喜久雄たちが成し遂げた造船計画・設計における成果は、実は様々な先人たちの業績の上に構築されたものであった。

意によるものであった。中武先生が退官された後も同図書室はもちろんのこと、『吾』をご担当の篠田岳志教授、田中太氏助手といった先生方に一方ならぬご親切を継続していただいた。厚くお礼申し上げます次第である。

さて私が取り上げる野中季雄は、日本が独自に艦艇を建造する技術を国際的水準に引き上げ、また艦艇の基本計画や設計、そして進水からその後の艤装工事といった、造船面における独立を成し遂げるため、地道

野中は一九一四（大正三）年からは呉海軍工廠の造船部長を務め、日本海軍の「八八艦隊計画」を建造面から推進したが、一九二二（大正一）年二月六日に調印され（日本は八月五日に批准）、翌一九二三（大正一二）年八月一七日に発効した「ワシントン軍縮条約」のために実現に至らなかった。もっとも、「八八艦隊計画」は日本の国家財政からして手に余るものだったとされている。四九歳だった野中は一九二三（大正一二）年一二月に造船中将に昇進後、四日後には予備役へ編入された。

この軍縮の実施で海軍を去った人々は准士官以上で一七〇〇人、下士官兵その他で二万人以上とされている。当時の加藤友三郎海軍大臣が「成ルヘク上級者ヲ多く淘汰シ下級者ヲ多く残シタシ」と方針を示したというが、人的資源の点でも海軍はその規模縮小を余儀なくされたのである。⁹⁾

試みに福川秀樹編著『日本海軍将官辞典』（二〇〇〇年）を参考にすると、一九二三（大正一二）年から一九二五（大正一四）年にかけて現役を退いた将官が極めて多い。中には死亡による者もあるが、概略で次のような傾向になる。一九二三（大正一二）年に一〇一人が海軍の現役を退いている。兵科将官は五九人が数えられるが、その内には加藤友三郎の死去も含まれている。造船官は五人で野中の他に近藤基樹や藤田益三、大久保立、岩野誠一郎がこの年に現役を退いた。翌一九二四（大正一三）年には予備役に編入された者たちは五七人で、内兵科将官は三二人、造船官は山本開蔵たち五人である。さらに一九二五（大正一四）年には六四人で、兵科将官三六人、造船官は岩佐尚一たち三人が数えられる。数え方にも異同があるであろうが、数値的な大要は動くまい。この三年間に現役を退いた将官は、他の年と比較して多い。これに対して軍縮による整理が始まる直前の一九二二（大正一一）年は一人（死去事例含む）、軍縮の整理が終わった後とみなせる一九二六（大正一五）年は三人で、これはいずれも死亡によるものである。一九二七（昭和一二）年には一転して五三人と増加するが、一九二八（昭和三）年には再び減少し二五人、そして一九二九（昭和四）年に三一人となる。さらにその翌年の一九三〇（昭和五）年は二八人である。ただしこうした人的動向の正確さを追究しようとすれば、暦年ではなく年度を使用して観察すべきかもしれない。

海軍将官予備役編入等年分析表

福川秀樹編著『日本海軍将官辞典』（2000年）を基に分析しており、海軍兵学校、海軍機関学校以前に任官した者を「建軍期」、「海機建」と表記した点も同様である。なお、兵学校の卒業期と機関学校の卒業期には19期のズレがあり、年次的に兵学校の20期が機関学校の1期という具合に相応する。

大正 11年	将官氏名	出身県	最終階級	所属科	兵科・機関科 科 出身期	昇進年	予備役編入等年 (死去年含む)	備考
1	東伏見宮 依仁親王	(皇族)	大将	建軍期		1918年	1922年	死去年
2	有馬 良橘	和歌山県	大将	兵科	12期	1919年	1922年	
3	松村 龍雄	佐賀県	中将	兵科	14期	1916年	1922年	
4	山中 柴吉	山口県	中将	兵科	15期	1918年	1922年	
5	舟越 楯四郎	兵庫県	中将	兵科	16期	1919年	1922年	
6	外波 辰三郎	愛知県	少将	兵科	19期	1917年	1922年	機関科へ転科
7	安村 介一	山口県	少将	兵科	23期	1921年	1922年	
				所属科計	7人			
8	田中 龍男	東京都	少将	機関	5期	1921年	1922年	
9	柳沢 祐冬	山口県	少将	機関	5期	1921年	1922年	
10	荒尾 文雄	熊本県	少将	機関	7期	1922年	1922年	
11	与倉 守之助	東京都	少将	機関	7期	1922年	1922年	待命
				所属科計	4人			
年 計		11人						

大正 12年	将官氏名	出身県	最終階級	所属科	兵科・機関科 科 出身期	昇進年	予備役編入等年 (死去年含む)	備考
1	加藤 友三郎	広島県	元帥	兵科	7期	1923年	1923年	昇進1日後死去
2	島村 速雄	高知県	元帥	兵科	7期	1923年	1923年	死亡時昇進

3	加藤 定吉	東京都	大将	兵科	10期	1918年	1923年	
4	名和 又八郎	福井県	大将	兵科	10期	1918年	1923年	
5	山屋 他人	岩手県	大将	兵科	12期	1919年	1923年	
6	佐藤 鉄太郎	山形県	中将	兵科	14期	1916年	1923年	
7	千坂 智次郎	山形県	中将	兵科	14期	1917年	1923年	
8	木村 剛	宮城県	中将	兵科	15期	1918年	1923年	
9	布目 満造	和歌山県	中将	兵科	15期	1920年	1923年	
10	向井 彌一	佐賀県	中将	兵科	15期	1920年	1923年	
11	田中 耕太郎	兵庫県	中将	兵科	16期	1922年	1923年	
12	山路 一善	愛媛県	中将	兵科	17期	1918年	1923年	
13	吉田 増次郎	静岡県	中将	兵科	17期	1920年	1923年	
14	山岡 豊一	鳥取県	中将	兵科	17期	1921年	1923年	
15	山口 鋭	静岡県	中将	兵科	17期	1921年	1923年	
16	河田 勝治	宮城県	中将	兵科	17期	1922年	1923年	
17	大橋 省	愛知県	中将	兵科	18期	1920年	1923年	機関科へ転科
18	佐藤 皐蔵	岩手県	中将	兵科	18期	1920年	1923年	
19	吉田 清風	鹿児島県	中将	兵科	18期	1920年	1923年	
20	下村 延太郎	京都府	中将	兵科	18期	1921年	1923年	
21	松村 純一	東京都	中将	兵科	18期	1921年	1923年	
22	中島 資朋	静岡県	中将	兵科	19期	1921年	1923年	
23	水谷 千万吉	愛知県	中将	兵科	19期	1922年	1923年	機関科へ転科
24	竹内 重利	愛媛県	中将	兵科	20期	1922年	1923年	
25	山内 四郎	福岡県	中将	兵科	21期	1923年	1923年	待命
26	川原 袈裟太郎	佐賀県	少将	兵科	17期	1917年	1923年	
27	中川 繁丑	高知県	少将	兵科	19期	1918年	1923年	
28	島内 恒太	佐賀県	少将	兵科	20期	1919年	1923年	
29	中村 正奇	東京都	少将	兵科	20期	1919年	1923年	
30	篠崎 真介	鹿児島県	少将	兵科	20期	1920年	1923年	
31	野崎 小十郎	高知県	少将	兵科	21期	1919年	1923年	
32	巖崎 茂四郎	茨城県	少将	兵科	21期	1920年	1923年	
33	勝木 (河内) 源次郎	山口県	少将	兵科	21期	1920年	1923年	
34	田口 久盛	高知県	少将	兵科	21期	1920年	1923年	
35	福田 真助	山口県	少将	兵科	21期	1920年	1923年	
36	桜井 真清	愛媛県	少将	兵科	22期	1920年	1923年	
37	古川 弘	愛知県	少将	兵科	22期	1920年	1923年	
38	福島 熊太郎	高知県	少将	兵科	22期	1921年	1923年	
39	大見 (高洲) 丙子郎	東京都	少将	兵科	23期	1921年	1923年	
40	増田 幸一	佐賀県	少将	兵科	23期	1921年	1923年	
41	横尾 尚	佐賀県	少将	兵科	23期	1921年	1923年	
42	関田 駒吉	高知県	少将	兵科	24期	1921年	1923年	
43	花房 太郎	岡山県	少将	兵科	24期	1921年	1923年	
44	原田 正作	山口県	少将	兵科	24期	1921年	1923年	
45	井口 第二郎	東京都	少将	兵科	24期	1922年	1923年	
46	石川 秀三郎	千葉県	少将	兵科	25期	1921年	1923年	
47	井手 元治	佐賀県	少将	兵科	25期	1922年	1923年	
48	岡村 秀二郎	山口県	少将	兵科	25期	1922年	1923年	
49	上田 吉次	山形県	少将	兵科	26期	1922年	1923年	
50	小山 武	山梨県	少将	兵科	26期	1922年	1923年	
51	菅沼 周次郎	長崎県	少将	兵科	26期	1922年	1923年	
52	日高 謹爾	栃木県	少将	兵科	26期	1922年	1923年	
53	人見 三良	東京都	少将	兵科	26期	1922年	1923年	
54	平岩 (小寺) 元雄	愛知県	少将	兵科	26期	1922年	1923年	
55	福田 一郎	熊本県	少将	兵科	26期	1922年	1923年	
56	山口 伝一	佐賀県	少将	兵科	26期	1922年	1923年	
57	油谷 堅蔵	兵庫県	少将	兵科	26期	1922年	1923年	

58	太田原 達	東京都	少将	兵科	26期	1923年	1923年	
59	島崎 保三	岩手県	少将	兵科	27期	1923年	1923年	横須賀鎮守府附
			所属科計			59人		
60	種子田 右八郎	鹿児島県	総監(少将)	海機建		1914年	1923年	造兵一等総監
61	市川 清次郎	三重県	中将	海機建		1914年	1923年	
62	中島 与曾八	静岡県	中将	海機建		1916年	1923年	
63	船橋 善弥	三重県	中将	海機建		1917年	1923年	
64	木佐木 幸輔	鹿児島県	中将	海機建		1918年	1923年	
65	宮川 邦基	茨城県	中将	機関	1期	1922年	1923年	
66	風間 篤次郎	広島県	少将	機関	2期	1920年	1923年	
67	金子 文作	山口県	少将	機関	3期	1920年	1923年	
68	栗田 富太郎	青森県	少将	機関	3期	1920年	1923年	
69	竹内 寛	福井県	少将	機関	5期	1921年	1923年	
70	関 重光	神奈川県	少将	機関	5期	1922年	1923年	
71	川上 滴三	新潟県	少将	機関	6期	1922年	1923年	
72	安住 省一	宮城県	少将	機関	7期	1922年	1923年	
73	藤江 逸志	大阪府	少将	機関	9期	1920年	1923年	
			所属科計			14人		
74	近藤 基樹	東京都	総監(少将)	造船		1914年	1923年	
75	大久保 立	静岡県	中将	造船		1922年	1923年	
76	野中 季雄	熊本県	中将	造船		1923年	1923年	
77	藤田 益三	東京都	少将	造船		1920年	1923年	
78	岩野 誠一郎	千葉県	少将	造船		1922年	1923年	
			所属科計			5人		
79	伊藤 安吉	東京都	少将	造機		1919年	1923年	
			所属科計			1人		
80	有坂 紹蔵	東京都	中将	造兵		1920年	1923年	
81	吉田 太郎	東京都	少将	造兵		1921年	1923年	
82	小山 十万洲	東京都	少将	造兵		1922年	1923年	
83	柴内 宏	東京都	少将	造兵		1922年	1923年	
			所属科計			4人		
84	志佐 勝	長崎県	総監(少将)	主計		1914年	1923年	一等総監
85	相原文四郎	山梨県	総監(少将)	主計		1919年	1923年	
86	佐野 雄治	群馬県	中将	主計		1921年	1923年	
87	山崎 位	高知県	中将	主計		1922年	1923年	
88	飯田 久太郎	岡山県	少将	主計		1922年	1923年	
89	宇土 兵蔵	長崎県	少将	主計		1920年	1923年	
90	斎藤 芳太郎	東京都	少将	主計		1921年	1923年	
91	徳永 晃	熊本県	少将	主計		1921年	1923年	
92	豊島 精太郎	長崎県	少将	主計		1922年	1923年	
			所属科計			9人		
93	大石 繁吉	京都府	中将	軍医		1921年	1923年	
94	西 勇雄	熊本県	中将	軍医		1922年	1923年	
95	中川 平八	愛知県	少将	軍医		1919年	1923年	
96	加藤 安吉	静岡県	少将	軍医		1921年	1923年	
97	栗田 俊三	広島県	少将	軍医		1921年	1923年	
98	山本 英忠	長野県	少将	軍医		1921年	1923年	
99	隈川 基	神奈川県	少将	軍医		1922年	1923年	
100	宮尾 信治	新潟県	少将	軍医		1922年	1923年	
101	田中 筠彦	鳥取県	少将	軍医		1923年	1923年	死亡時昇進
			所属科計			9人		
年 計		101人						

大正 13年	将官氏名	出身県	最終階級	所属科	兵科・機関科 科 出身期	昇進年	予備役編入等年 (死去年含む)	備考
1	小栗 孝三郎	石川県	大将	兵科	15期	1923年	1924年	
2	栃内 曾次郎	岩手県	大将	兵科	13期	1920年	1924年	
3	野間口 兼雄	鹿児島県	大将	兵科	13期	1920年	1924年	
4	村上 格一	佐賀県	大将	兵科	11期	1918年	1924年	
5	飯田 久恒	東京都	中将	兵科	19期	1921年	1924年	
6	金田 秀太郎	静岡県	中将	兵科	21期	1923年	1924年	
7	桑島 省三	兵庫県	中将	兵科	20期	1923年	1924年	
8	小林 研蔵	鳥取県	中将	兵科	19期	1923年	1924年	
9	中野 直枝	高知県	中将	兵科	15期	1917年	1924年	
10	吉岡 範策	熊本県	中将	兵科	18期	1921年	1924年	
11	青木 薫平	神奈川県	少将	兵科	27期	1923年	1924年	
12	犬塚 助次郎	佐賀県	少将	兵科	21期	1920年	1924年	
13	今泉 哲太郎	佐賀県	少将	兵科	25期	1921年	1924年	
14	江口 金馬	佐賀県	少将	兵科	27期	1923年	1924年	
15	大石 正吉	京都府	少将	兵科	24期	1921年	1924年	
16	加々良(久原)乙比古	佐賀県	少将	兵科	27期	1923年	1924年	
17	黒瀬 清一	山口県	少将	兵科	26期	1922年	1924年	
18	小泉 親治	東京都	少将	兵科	27期	1923年	1924年	
19	小牧 自然	高知県	少将	兵科	25期	1921年	1924年	
20	匝瑳 胤次	大阪府	少将	兵科	26期	1922年	1924年	
21	武富 咸一	東京都	少将	兵科	27期	1923年	1924年	
22	武光 一	山口県	少将	兵科	26期	1922年	1924年	
23	筑土 次郎	東京都	少将	兵科	24期	1921年	1924年	
24	鳥寄 保三	岩手県	少将	兵科	27期	1923年	1924年	
25	南郷 次郎	東京都	少将	兵科	26期	1922年	1924年	
26	三上 良忠	佐賀県	少将	兵科	27期	1923年	1924年	
27	宮治 民三郎	愛知県	少将	兵科	25期	1921年	1924年	
28	牟田 亀太郎	佐賀県	少将	兵科	26期	1921年	1924年	
29	森 初次	香川県	少将	兵科	27期	1923年	1924年	
30	山本 信次郎	神奈川県	少将	兵科	26期	1922年	1924年	
31	横地 錠二	石川県	少将	兵科	27期	1923年	1924年	
32	吉武 貞輔	山口県	少将	兵科	26期	1923年	1924年	
所属科計					32人			
33	岩辺 季貴	熊本県	中将	機関	1期	1923年	1924年	
34	増井 敬次郎	静岡県	中将	機関	2期	1923年	1924年	
35	秋元 猛四郎	青森県	少将	機関	9期	1923年	1924年	
36	大内 愛七	兵庫県	少将	機関	4期	1921年	1924年	
37	木村 貫一	東京都	少将	機関	3期	1920年	1924年	
38	重村 義一	広島県	少将	機関	3期	1920年	1924年	
39	本城 貞次郎	岡山県	少将	機関	7期	1923年	1924年	
40	牧野 豊助	滋賀県	少将	機関	8期	1923年	1924年	
所属科計					8人			
41	山本 開蔵	埼玉県	中将	造船		1921年	1924年	
42	柴田 秀生	三重県	少将	造船		1923年	1924年	
43	新庄 實氏	京都府	少将	造船		1923年	1924年	
44	諏訪 小熊	鹿児島県	少将	造船		1923年	1924年	
45	東海 勇蔵	青森県	少将	造船		1923年	1925年	
所属科計					5人			
46	吉田 仙之助	東京都	少将	造機		1921年	1924年	
所属科計					1人			
47	楠瀬 熊治	高知県	中将	造兵		1921年	1924年	
48	中島 章	長崎県	少将	造兵		1922年	1924年	
所属科計					2人			

49	久野 工	高知県	中将	主計		1923年	1924年	
50	林 好郎	滋賀県	少将	主計		1923年	1924年	
所属科計					2人			
51	鈴木 裕三	愛知県	中将	軍医		1921年	1924年	
52	吉河 為久蔵	京都府	中将	軍医		1923年	1924年	
53	新井 慶三郎	群馬県	少将	軍医		1923年	1924年	
54	桑原 賢鏡	東京都	少将	軍医		1923年	1924年	
55	高宮 隆	東京都	少将	軍医		1923年	1924年	
56	中島 悦郎	愛知県	少将	軍医		1923年	1924年	
57	服部 (小田) 清一	広島県	少将	軍医		1923年	1924年	
所属科計					7人			
年 計		57人						

大正 14年	将 官 氏 名	出身県	最終階級	所属科	兵科・機関科 科 出身期	昇進年	予備役編入等年 (死去年含む)	備 考
1	井出 謙治	静岡県	大将	兵科	16期	1924年	1925年	
2	堀内 三郎	兵庫県	中将	兵科	17期	1919年	1925年	
3	斎藤 半六	石川県	中将	兵科	17期	1920年	1925年	
4	平塚 保	東京都	中将	兵科	19期	1921年	1925年	機関科へ転科
5	中里 重次	山形県	中将	兵科	20期	1922年	1925年	
6	正木 義太	広島県	中将	兵科	21期	1924年	1925年	
7	藤原 英三郎	佐賀県	中将	兵科	21期	1923年	1925年	
8	内田 虎三郎	熊本県	中将	兵科	22期	1923年	1925年	
9	田尻 (空閑) 唯二	佐賀県	中将	兵科	23期	1924年	1925年	
10	松下 東治郎	佐賀県	中将	兵科	23期	1924年	1925年	
11	松村 菊勇	佐賀県	中将	兵科	23期	1924年	1925年	
12	小松 直幹	高知県	中将	兵科	25期	1925年	1925年	
13	四竈 孝輔	宮城県	中将	兵科	25期	1925年	1925年	
14	伊集院 俊	鹿児島県	少将	兵科	21期	1919年	1925年	死去年
15	植村 信男	広島県	少将	兵科	26期	1922年	1925年	
16	宇佐川 知義	熊本県	少将	兵科	26期	1922年	1925年	
17	榊山 可也	鹿児島県	少将	兵科	26期	1922年	1925年	
18	高橋 節雄	島根県	少将	兵科	26期	1923年	1925年	
19	大寺 量吉	東京都	少将	兵科	27期	1924年	1925年	
20	漢那 憲和	沖縄県	少将	兵科	27期	1923年	1925年	
21	関 干城	東京都	少将	兵科	27期	1923年	1925年	
22	田村 丕顕	岩手県	少将	兵科	27期	1924年	1925年	
23	宮村 曆造	大分県	少将	兵科	27期	1923年	1925年	
24	井出 光輝	広島県	少将	兵科	28期	1924年	1925年	
25	神代 護次	佐賀県	少将	兵科	28期	1924年	1925年	
26	白石 信成	愛媛県	少将	兵科	28期	1924年	1925年	
27	高橋 良司	群馬県	少将	兵科	28期	1925年	1925年	
28	中城 虎意	高知県	少将	兵科	28期	1924年	1925年	
29	福与 平三郎	福岡県	少将	兵科	28期	1924年	1925年	
30	松平 保男	東京都	少将	兵科	28期	1925年	1925年	
31	森 (中島) 電三	東京都	少将	兵科	28期	1924年	1925年	
32	矢野 馬吉	高知県	少将	兵科	28期	1925年	1925年	
33	渡辺 玉樹	東京都	少将	兵科	28期	1924年	1925年	
34	松本 匠	宮崎県	少将	兵科	29期	1925年	1925年	
35	右田 熊五郎	熊本県	少将	兵科	29期	1925年	1925年	
36	和田 (西村) 健吉	広島県	少将	兵科	29期	1925年	1925年	
所属科計					36人			
37	岡崎 貞伍	宮城県	中将	機関	2 期	1923年	1925年	
38	水谷 光太郎	兵庫県	中将	機関	5 期	1925年	1925年	
39	真木 俊魁	東京都	少将	機関	8 期	1924年	1925年	

40	武村 耕太郎	大阪府	少将	機関	8期	1923年	1925年	
41	藤沢 磐	東京都	少将	機関	7期	1923年	1925年	
42	川路 俊徳	東京都	少将	機関	7期	1922年	1925年	
43	宮崎 寅吉	東京都	少将	機関	6期	1922年	1925年	
44	角田 俊雄	東京都	少将	機関	10期	1925年	1925年	
45	松原 彦七	愛媛県	少将	機関	10期	1925年	1925年	
46	後藤 兼三	福岡県	少将	機関	10期	1924年	1925年	
				所属科計	10人			
47	有田 延	福岡県	少将	造船		1924年	1925年	
48	岩佐 尚一	島根県	少将	造船		1924年	1925年	
49	福井 順平	静岡県	少将	造船		1924年	1925年	
				所属科計	3人			
50	斎藤 真	福井県	中将	造機		1924年	1925年	
51	福川 与一	東京都	少将	造機		1922年	1925年	
				所属科計	2人			
52	野田 鶴雄	京都府	中将	造兵		1925年	1925年	
53	田中 龍三	静岡県	少将	造兵		1923年	1925年	
54	塚本 直	福岡県	少将	造兵		1924年	1925年	
				所属科計	3人			
55	柏木 正文 (山口幸四郎)	鹿児島県	中将	主計		1924年	1925年	
56	深水 貞吉	長崎県	中将	主計		1923年	1925年	
57	棚町 五十吉	福岡県	少将	主計		1925年	1925年	
58	中野 重春	島根県	少将	主計		1923年	1925年	
59	服部 邦光	兵庫県	少将	主計		1925年	1925年	
				所属科計	5人			
60	鈴木 寛之助	長野県	中将	軍医		1925年	1925年	死亡時昇進
61	平野 勇	徳島県	中将	軍医		1923年	1925年	
62	於保 熊雄	東京都	少将	軍医		1925年	1925年	
63	砂堀 雅人	広島県	少将	軍医		1924年	1925年	
64	立野 至	宮崎県	少将	軍医		1922年	1925年	
65	福田 了	三重県	少将	軍医		1924年	1925年	
				所属科計	6人			
年 計		64人						

大正 15年	将官氏名	出身県	最終階級	所属科	兵科・機関科 科 出身期	昇進年	予備役編入等年 (死去年含む)	備考
1	斎藤 七五郎	宮城県	中将	兵科	20期	1922年	1926年	死去年
2	森本 義寛	高知県	少将	兵科	22期	1920年	1926年	死去年
				所属科計	2人			
3	田中 龍三	静岡県	少将	造兵		1923年	1926年	死去年
				所属科計	1人			
年 計		3人						

昭和 2年	将官氏名	出身県	最終階級	所属科	兵科・機関科 科 出身期	昇進年	予備役編入等年 (死去年含む)	備考
1	白根 熊三	山口県	中将	兵科	24期	1925年	1927年	
2	犬塚 (野田) 太郎	佐賀県	中将	兵科	25期	1925年	1927年	
3	小倉 嘉明	神奈川県	中将	兵科	27期	1927年	1927年	
4	古川 四郎	愛知県	中将	兵科	27期	1927年	1927年	
5	河合 (島田) 退蔵	福井県	少将	兵科	27期	1923年	1927年	
6	寺岡 平吾	秋田県	少将	兵科	27期	1923年	1927年	
7	村越 八郎	新潟県	少将	兵科	27期	1923年	1927年	
8	遠藤 格	宮城県	少将	兵科	28期	1924年	1927年	
9	坂元 貞二	鹿児島県	少将	兵科	28期	1924年	1927年	
10	高橋 律人	広島県	少将	兵科	28期	1924年	1927年	

11	村瀬 貞次郎	滋賀県	少将	兵科	29期	1925年	1927年
12	小副川 敬治	東京都	少将	兵科	29期	1926年	1927年
13	田中 勇	福岡県	少将	兵科	29期	1926年	1927年
14	田岡 勝太郎	山口県	少将	兵科	29期	1926年	1927年
15	山田 正興	東京都	少将	兵科	29期	1926年	1927年
16	池田 他人	山口県	少将	兵科	30期	1926年	1927年
17	石川 清	大阪府	少将	兵科	30期	1926年	1927年
18	金子 養三	広島県	少将	兵科	30期	1926年	1927年
19	河村 達蔵	神奈川県	少将	兵科	30期	1926年	1927年
20	高崎 親輝	鹿児島県	少将	兵科	30期	1926年	1927年
21	常盤 盛衛	福島県	少将	兵科	30期	1926年	1927年
22	藤井 謙介	山口県	少将	兵科	30期	1926年	1927年
23	森田 登	兵庫県	少将	兵科	30期	1926年	1927年
24	近藤 (内田) 直方	山口県	少将	兵科	30期	1927年	1927年
25	佐藤 巳之吉	群馬県	少将	兵科	30期	1927年	1927年
26	徳田 伊之助	山口県	少将	兵科	30期	1927年	1927年
27	本宿 (菅) 直次郎	岩手県	少将	兵科	30期	1927年	1927年
28	益子 六弥	茨城県	少将	兵科	30期	1927年	1927年
29	杉浦 正雄	愛知県	少将	兵科	31期	1927年	1927年
30	中山 勲信	新潟県	少将	兵科	31期	1927年	1927年
				所属科計	30人		
31	河合 俊太郎	石川県	中将	機関	8期	1927年	1927年
32	平部 貞一	宮崎県	少将	海機建		1911年	1927年
33	神崎 保	宮崎県	少将	機関	10期	1925年	1927年
34	若生 繁吉	宮城県	少将	機関	10期	1926年	1927年
35	末常 共介	山口県	少将	機関	11期	1925年	1927年
36	岸田 東次郎	東京都	少将	機関	11期	1926年	1927年
37	新田 義雄	山形県	少将	機関	11期	1926年	1927年
38	太田 十三男	東京都	少将	機関	11期	1927年	1927年
				所属科計	8人		
39	磯崎 清吉	徳島県	中将	造船		1927年	1927年
40	山口 徳次郎	東京都	少将	造船		1925年	1927年
41	塩見 和太郎	三重県	少将	造船		1927年	1927年
				所属科計	3人		
42	永安 晋次郎 (小網新司郎)	東京都	中将	主計		1925年	1927年
43	牧 三良	東京都	中将	主計		1926年	1927年
44	服部 正之	熊本県	少将	主計		1925年	1927年
45	石倉 俊寛	島根県	少将	主計		1926年	1927年
46	国分 良吉	埼玉県	少将	主計		1926年	1927年
47	横見 (久保田) 補一	秋田県	少将	主計		1926年	1927年
				所属科計	6人		
48	雨宮 量七郎	埼玉県	中将	軍医		1925年	1927年
49	石原 純固	福井県	少将	軍医		1919年	1927年
50	小林 幹	茨城県	少将	軍医		1923年	1927年
51	黒岩 賢三	群馬県	少将	軍医		1926年	1927年
52	笹野 正人	宮城県	少将	軍医		1927年	1927年
53	橋本 正直	埼玉県	少将	軍医		1927年	1927年
				所属科計	6人		
年 計		53人					

昭和 3年	将 官 氏 名	出身県	最終階級	所属科	兵科・機関科 科 出身期	昇進年	予備役編入等年 (死去年含む)	備 考
1	斎藤 実	岩手県	大将	兵科	6期	1912年	1928年	
2	山下 源太郎	山形県	大将	兵科	10期	1918年	1928年	後備役
3	百武 三郎	佐賀県	大将	兵科	19期	1928年	1928年	

4	長沢 直太郎	岩手県	中将	兵科	26期	1926年	1928年	
5	小山田 繁蔵	岩手県	中将	兵科	27期	1927年	1928年	
6	兼坂 隆	千葉県	中将	兵科	27期	1927年	1928年	
7	岸井 孝一	石川県	少将	兵科	28期	1924年	1928年	
8	高橋 寿太郎	岩手県	少将	兵科	28期	1924年	1928年	
9	中島 晋	佐賀県	少将	兵科	29期	1925年	1928年	
10	井上 四郎	福岡県	少将	兵科	31期	1927年	1928年	
11	大谷 四郎	東京都	少将	兵科	31期	1928年	1928年	
12	小倉 泰造	岐阜県	少将	兵科	31期	1928年	1928年	
13	清藤 徳弥	青森県	少将	兵科	31期	1928年	1928年	
14	松崎 直	熊本県	少将	兵科	31期	1928年	1928年	
15	山口 延一	佐賀県	少将	兵科	35期	1928年	1928年	
所属科計					15人			
16	吉沢 作造	神奈川県	少将	機関	10期	1926年	1928年	
17	小泉 武三	兵庫県	少将	機関	12期	1927年	1928年	
所属科計					2人			
18	鈴木 圭二	新潟県	中将	造船		1925年	1928年	
20	昌谷 三雄	東京都	少将	造船		1927年	1928年	
所属科計					2人			
21	伍堂 卓雄	石川県	中将	造兵		1926年	1928年	
所属科計					1人			
22	芹沢 正人	山形県	少将	主計		1928年	1928年	
所属科計					1人			
23	宮川 正雄	山梨県	少将	軍医		1926年	1928年	
24	草野 直夫	東京都	少将	軍医		1927年	1928年	
25	今沢 正冬	山梨県	少将	軍医		1928年	1928年	
26	山下 奉表	高知県	少将	軍医		1928年	1928年	
所属科計					4人			
年 計		25人						

昭和 4年	将官氏名	出身県	最終階級	所属科	兵科・機関科 出身期	昇進年	予備役編入等年 (死去年含む)	備考
1	鈴木 貫太郎	千葉県	大将	兵科	14期	1923年	1929年	
2	竹下 勇 (山元勇三郎)	鹿児島県	大将	兵科	15期	1923年	1929年	
3	古川 鈍三郎	福井県	中将	兵科	21期	1923年	1929年	
4	吉川 安平	山口県	中将	兵科	22期	1923年	1929年	
5	上田 良武	鹿児島県	中将	兵科	28期	1928年	1929年	
6	岸科 政雄	兵庫県	中将	兵科	28期	1929年	1929年	
7	谷口 美貞	京都府	中将	兵科	29期	1929年	1929年	
8	七田 今朝一	佐賀県	少将	兵科	29期	1925年	1929年	
9	館 明治郎	富山県	少将	兵科	30期	1926年	1929年	
10	宮坂 助次郎	長野県	少将	兵科	30期	1926年	1929年	
11	向田 金一	石川県	少将	兵科	30期	1926年	1929年	
12	畔柳 三男三	神奈川県	少将	兵科	31期	1927年	1929年	
13	市来崎 慶一	鹿児島県	少将	兵科	31期	1929年	1929年	
14	菊井 信義	鳥取県	少将	兵科	31期	1929年	1929年	
15	富岡 愛次郎	東京都	少将	兵科	32期	1929年	1929年	死亡時昇進
16	長井 実	神奈川県	少将	兵科	32期	1929年	1929年	
17	増田 乙三郎	神奈川県	少将	兵科	32期	1929年	1929年	
所属科計					17人			
18	池田 岩三郎	広島県	中将	機関	3期	1924年	1929年	
19	林 (竹田) 正男	佐賀県	少将	機関	12期	1929年	1929年	
20	石河 英吉	東京都	少将	機関	13期	1929年	1929年	
21	満岡 諒次	佐賀県	少将	機関	13期	1929年	1929年	

			所属科計		4人			
22	佐々 初喜	熊本県	少将	造船		1929年	1929年	
			所属科計		1人			
23	常盤 秀二	香川県	少将	造機		1926年	1929年	
			所属科計		1人			
24	武藤 稲太郎	広島県	中将	造兵		1926年	1929年	
			所属科計		1人			
25	太田 一郎	東京都	少将	主計		1926年	1929年	
26	吉村 梅吉	山口県	少将	主計		1929年	1929年	
			所属科計		2人			
27	折茂 恒治	群馬県	少将	軍医		1928年	1929年	
28	壁島 為造	神奈川県	少将	軍医		1928年	1929年	
29	竹居 光積	東京都	少将	軍医		1928年	1929年	
30	今井 金三郎	岐阜県	少将	軍医		1929年	1929年	
31	塩見 長衛	京都府	少将	軍医		1929年	1929年	
			所属科計		5人			
年 計		31人						

昭和 5年	将官氏名	出身県	最終階級	所属科	兵科・機関科 科 出身期	昇進年	予備役編入等年 (死去年含む)	備 考
1	大谷 幸四郎	高知県	中将	兵科	23期	1924年	1930年	
2	宇川 濟	長野県	中将	兵科	28期	1928年	1930年	
3	立野 徳治郎	山口県	中将	兵科	28期	1928年	1930年	
4	島 祐吉	佐賀県	中将	兵科	29期	1929年	1930年	
5	米村 末喜	熊本県	中将	兵科	29期	1929年	1930年	
6	鹿江 三郎	佐賀県	少将	兵科	30期	1926年	1930年	
7	岡本 郁男	長崎県	少将	兵科	30期	1927年	1930年	
8	中島 権吉	岡山県	少将	兵科	30期	1927年	1930年	
9	東林 (桑原) 岩次郎	福井県	少将	兵科	31期	1928年	1930年	
10	広田 穰	新潟県	少将	兵科	32期	1929年	1930年	
11	木田 新平	香川県	少将	兵科	32期	1930年	1930年	
12	瀬崎 仁平	岡山県	少将	兵科	32期	1930年	1930年	
13	三戸 基介	山口県	少将	兵科	32期	1930年	1930年	
14	吉武 純蔵	東京都	少将	兵科	32期	1930年	1930年	
			所属科計		14人			
15	清水 得一	山形県	中将	機関	5期	1925年	1930年	
16	西 義克	東京都	少将	機関	11期	1926年	1930年	
17	城戸 忠彦	福岡県	少将	機関	12期	1928年	1930年	
18	竹内 泰民	三重県	少将	機関	12期	1928年	1930年	
19	赤堀 研吉	兵庫県	少将	機関	13期	1929年	1930年	
20	鈴木 重友	石川県	少将	機関	14期	1930年	1930年	死亡時昇進
			所属科計		6人			
21	石川 登喜治	福岡県	中将	造機		1930年	1930年	
			所属科計		1人			
22	堀 将之	石川県	少将	造兵		1929年	1930年	
			所属科計		1人			
23	栢田 次郎	長崎県	少将	主計		1927年	1930年	
			所属科計		1人			
24	大貫 安三	栃木県	中将	軍医		1927年	1930年	
25	高橋 通麿	東京都	少将	軍医		1928年	1930年	
26	氏家 孝次郎	宮城県	少将	軍医		1929年	1930年	
27	木村 律郎	神奈川県	少将	軍医		1930年	1930年	
			所属科計		4人			
28	磯野 周平	東京都	少将	薬剤		1926年	1930年	
			所属科計		1人			
年 計		28人						

いずれにせよ「ワシントン軍縮」により現役から退いた将官たちは、その後どのような方面に転じていったのであろうか。過去に財団法人の海軍有終会が『海軍有終会会員名簿』というものを発行していたが、一九四二（昭和一七）年や翌一九四三（昭和一八）年のそれをみると、大まかな傾向として兵科の場合は官庁の嘱託や海軍とつながりのある公的団体の名誉職的地位につき、技術科の場合は「三菱重工」や「藤永田造船所」、「浦賀船渠」といった造船所他の取締役や技術顧問といった役職につくことが多かった様子が窺われ、一部は大学に転じているようである。こうした組織的傾向性は、軍縮期においても類似していたのではなからうか。

そして野中李雄の場合は一九二四（大正一三）年から九州帝大工学部造船学科に教授として赴任し、造船第二講座を担当するようになったのである。造船不況の世相の中ではあったが、野中は教育者としても周囲の期待に違わぬ働きをした。さらに彼は元海軍造船官の先輩である山本開蔵たちとも協議を重ね、造船協会の九州における拠点として九州造船会を、三菱造船株式会社の長崎造船所々長斯波孝四郎等とともに創設し、初代会長に就任し、九大退官までその重責を務めた。野中はいわば海軍と大学、そして民間造船企業を結ぶ要の役割を果たした。いわば平賀が中央で担った役割を、野中は九州で遂行したともいえよう。

敗戦後に福岡市内の居宅が連合軍に接収された野中は、故郷の熊本県岩野村（現山鹿市鹿北町岩野）に隠棲した。時折海軍兵学校出身者が彼を訪れることもあったというが、戦後の社会の混乱の中で世間的には忘れられた存在であった。それに彼自身も、九州帝大で教えた学生たちのことなどを声高に語ることもせず、まさに「沈黙の技官」として年月を

過ごした。仮住まいの屋敷の隅に菜園を耕し、「季節の野菜をつくり食卓を飾り、近隣の知人の訪れに喜びつつ、しずかに談る一刻は、老先生の唯一の楽しみであった」とされている。野中はかつて自らも学んだ岩野小学校に奨学の意を込めた資金を贈り、後に「野中賞」と呼ばれた表彰を続けた。彼の妻女である都留子も「近所の子女に料理、裁縫、行儀作法等の指導を楽しみとして日々を送っていた」と語られている。¹¹

この人物の記録が今後も発見され、造船官や日本の造船技術の発達に関する新たな知見を附加してくれることを期待したい。そして今回取り上げた『吾』という冊子は、戦前の造船技術者育成に関する貴重な手掛かりを提供してくれる資料といえるのではなからうか。

一 造船業における現場実習を重視した野中李雄

（第八号、一九二九年二月）

「日本工業の将来と吾人の覚悟」

野中李雄先生述

今日の我が日本の状態を見るに、貿易は毎年々々入超又入超で過去四年度の平均は年に三億五千七百萬圓といふ額に上つてゐる。しかしこれもよくなつた方で数年前はもつと悪かつた。ともかく我が國から毎年これだけの金貨が出て行く譯になれば、日本はその中に破産して了はなければならぬ。しかるに、仲々破産しないのは理由がある筈である。それならば一體どこでバランスをとつてゐるのであろうか。それは貿易外の収支によるものである。貿易外の支出としては外債の利子、外人の備貸等があり、収入としては日本人が外國に投資した金に對する利子、

遊覽者の落す金、移民の送金、運賃等がある。日本の貿易外の収入と支出とを比べてみると、これは幸ひ収入の方が多い。その内で移民の送金も大きい額に達するが、こんなものをあてにしてはならぬ。一番大きいのは海運業による運賃であつて、大正十三年には二億千七百萬圓、十四年には一億二千九百萬圓、十五年には一億二千六百萬圓になつてゐる。

これは我國の貿易外収入の三割五分にあたつてゐる。國際の收支關係をハランスする大きなフアクターである。英國では海運の収入は貿易外収入の二割八分になつてゐる。英國は殖民地、其他外國への投資が非常に多いので、大海運國なれど割合から見れば大したものではないが、日本では仲々大切なものである。併しながらこんな貿易外收支を差し引いてもやはり日本から金が出て行つてゐる。大正十年には十億六千萬圓の正貨が外國にあつたが、今年の二月には九千六百萬圓になつて了つてゐる。

このために日貨の信用が段々うすくなつて、圓の價がどしどし下る。そのため金の輸出解禁が叫ばれてゐるのである。日本の金貨がどんく流れ出すので、金の輸出を禁じたのは大正六年であつた。そこで國內の金はへらなかつたが、外國にある分は見る見る中に減つて了つた。信用がなくなつた。圓の價が下つた。そこで日本が首を捻つて、これは一つ輸入を減す事をやるうちやないかという事になつた。先づ關稅を上げた。釐澤品税などというのがそれである。ところがそれでも輸入はふえて行つた。勿論釐澤品の輸入は少しは減つたかも知れないが、原料品及糧食品の輸入の激増によるものである。人口が増加するから糧食の輸入が多くなる。工業が発達すると原料品の輸入はますますふえる。それで釐澤品を少し位減したつて追ひ附かぬのである。只喜ばしい事は日本から出て行く精製品が年々多くなつてゐる事である。これは即ち工業立國の主

意の通りを知らず知らずに行つてゐる事になる。工業立國主義で行くには澤山の原料を入れねばならぬ。製品はどしどし出さねばならぬ。安い運賃で澤山入れて、安い運賃で澤山出さねばならぬ。即ち海運業を盛んにせねばならぬ。それには船の優秀と數とが條件となる。それには造船業の發達が必要である。かく考へて來ると、日本を富ます爲には先づ造船業を盛にせねばならぬ事となる。

又日本の水産立國説といふのががある。日本は世界第一の水産國で漁獲高は年に五億千七百萬圓に達してゐる。第二位は英國の二億八千萬圓、次が米國の一億五千萬圓である。併しながら日本の漁民は百五十萬人の多きに比し、英國は九萬、米國は三十二萬しかなく、又漁船の數から言つても日本は三十五萬四千隻もあるのに對し英國は二萬三千、米國は九萬に過ぎない。之は日本の船が小さい事によるのであろう。故に船をもつと大きくすれば、人はふやさずとも、もつと産額を増し得る筈である。殊に日本近海には海産が非常に多い。日本の海岸に限るには及ばぬ。世界中自由の公海は無限の富を藏して到る處で待つてゐる。日本の漁民は又その腕前に於いて優秀である。プリチツシユ、コロンピヤやカリホルニヤに於ける日本漁夫の老練さには外國人連中が舌を捲いて驚いてゐる。すでに數に於て、手練に於てかくの如き優れた漁民を有する日本は、これに船さへよくしたならばその漁獲高に於いてもつともつと富をかちうる事は明かな話である。その船をよくするには、やはり造船を盛にしなければならぬ。

故に工業立國策によるも、水産立國説に従ふも、先づ日本の造船業がその基をなさなければならぬ。

今度の内閣で大藏大臣になつた井上準之助氏は、震災内閣の稱ある山

本内閣の時も藏相としてモラトリアムを斷行して、あの財界の危機を救つた人である。この人がその著「我が國金融の現在及び將來」の中にも、「日本は將來に於て到底輸入を少くする事は出来ぬ、輸出もそうく大きくなる見込は立たぬ。故に、國際貸借のバランスをとる只一つの策として海運を盛にする事のみが残されてゐる」という結論を與へてゐる。

日本の船舶の量は世界第三位である。三位といつても甚だ貧弱なもので、老朽船が非常に多い。それで今後は益々新船を造つて量を増すと共に質の改良を計らねばならぬ。丁度今日その第一歩を踏み出した所である。諸君が今度實習にいかれたら、きつとどの工場も昨年又は一昨年と打つて變つた盛況を呈してゐるのに驚かされる事と思ふが、これは皆、今言つた老朽船の代りになるべき船である。併しこの盛況がいつまで續くかは問題である。ほんの一時的の現象だと見る人も多いが残念な次第である。

それでは何故日本の造船業は振はぬのであろうか。それは一口に言へば高くつくからである。例へば英國に注文すれば六十萬圓で出来る船でも、日本で造ると八十萬圓も九十萬圓もかゝる。それで船價を安くせねばならぬ。これはこれから単立つて行こうとする諸君に大いに覺悟して貰いたい。もつと良い、もつと安い船を造る事が目下の急務である。それでは今一步つきこんで、一體日本人は工業立國をおし通すに適當した國民であるだろつかという事を考へて見よう。之は實に大問題である。誰も云ふ、日本の職工は外國の職工に劣る。外國人なら一人でやれる事を日本人にやらせると二人も三人もかゝると。實際日本の職工を見てゐると體格は貧弱だし、力は少しいし、甚だ能率が悪い。

然るに此處に驚くべき事實がある。先年八幡の製鐵所で鉄力を作るた

めに獨逸人のロスキーという技師を雇つた事があつた。このロスキーが時の農商務大臣高橋氏に報告して次の様な事を述べてゐる。彼は言ふ。

日本の労働者には立派な素質がある。その證據には日本の軍隊を見よ。日本兵のかつぐ背囊は外國人のに比して決して輕くない。却つて重い場合がある。行軍における行程力は獨逸軍に於ける以上である。そんな人民の職工だけが能力のないわけがない。日本の職工が、日本の軍隊の様に規律ある教育と訓練を受け、日本の軍隊の様な營養を取り、日本の軍隊の様に勇敢で一致協力したならば、必ず、日本の職工の能力は外國の職工に優るとも劣らぬものとなるのである。諸君は製鐵所に行つて見たであらうが、ホット・ロールの仕事というものは苦しいものである。そのホット・ロールで、ロスキー氏が一ヶ月百五十噸を製産しようと誓つた時、日本人の技師達が目を見はつて、そんな無茶な事が出来るものかと言つた。ロスキーは平然として言つた。「何かまわぬ。きつとやつつけてみせる。」ところが果して、一日一日と熟練するにつれ、段々その標準に近づき、遂には獨逸工場の標準にまで進んだ。ロスキー氏は、之は日本人は體格こそ劣るが手先きが器用なものと體の使ひ方がうまいのによるものだと言つてゐる。それで外國人出来る事なら、きつと日本人にも出来る。それには適當な指導と、嚴肅なる規律の維持とが必要な事は前に述べた通りである。

彼は此の外にもその報告書に色々な事を書いてゐる。日本の職工には無斷欲動が多い。それがために仕事に狂ひが生じる。吾々外國人からみると日本の工場には職工が多すぎる。これは彼等の絶へざる欲動にそなへる爲だろつと思はれる。又、彼等の上に立つ監督者、組長等が悪い。

日本の技師や職工長は、ある學校を出たという理由のみで人の頭になる

特權を與へられている。一體それで行けるのか。彼等の發する命令にそれで確信があるか。やらせる仕事に自信があるか。自分の仕事はどんなにしてやるべきかがくわしく解つてゐて始めて、發する命令に確信があり、やらせる仕事に自信が出るのである。自分が本國から連れて來た職工長達は職工が休めば何時でも自分が代つて職工以上にやれる人達ばかりである。とこんな事を言つて居る。これは最も大切な事で諸君も大いに考へていただきたい。我々の時代には學校を出たらすぐに職についたものだ。ロスキーの報告を見ると誠に恥かしい次第である。が諸君に御話する。只一つ、横須賀工廠での思ひ出がある。扉船の修理の實習中であつたが、なれぬ手附きでコーキングをやらされ、オーカムはうまく打てず手ばかり打つて痕だらけになつて苦しんでゐると、その時居た組長が、自分に向つて「あなた方はしあはせです。」と言つた。「こんなに苦しい目にあつてゐるのに仕合せとは何故だ。」と問ふと、彼はこう答へた。「いやほんとにあなた方は仕合せです。今の内にこんな事を經驗して置かれると、さきで人を使ふ時に、仕事に親しみが有り、自信があるから、よく注意がゆきとどき、人に仕事をさせることが自然とわかります。若い時にこんな經驗をされるのは實に有難い事です。」自分は彼の言葉に感じ、又彼を偉い人だなどと思つた。果して彼は偉かつた。後で自分が工廠づつめになつて勤務に行つた時、彼は既に技手にぬきんでられてゐて、その後も大いに働きました。

實習は成程苦しい。併しその苦しい實習から得た體驗と智識は、仕事に對する自信の根底となる。實習をやつて來てからは講義も明らかになるし、複雑な圖も楽々と読める様になる。之は諸君の經歷の大切な要素となるものである。この事を言はんが爲に今の獨逸人の話をしたので

あるが、日本人は外國人に決して劣らぬ、立派に工業立國でやれるという例話をも一つ擧げよう。諸君は有名な戸畑鑄物會社を知つてゐるであらう。同時にその社長たる鮎川義介氏の名も覚えてゐる事と思ふ。この人は東大出身で、御存じの通り偉大な體格の持主ではない。寧ろ小柄の人である。この鮎川氏は大學を出ると自ら進んで芝浦製作所で職工になつた。そして平職工の生活を二年も續けて、今度は米國に渡り又鑄物工場に入つて職工となつた。その時の話しを丁友會（東大工學部）の集りで次の様に話してゐる。彼は彼地のマレアブル・キヤスト・アイアンの製造工場に一週間五弗の職工として稽古した。融けた鐵を入れる取鍋ちくべが日本では四五貫なのに米國では十一貫もある重い奴を持たせる。ところが外國人は平氣でそれを持つ。しかも日本人の様に吞氣にやるのではなくて、どんな仕事をやつてゆく。それが鮎川氏には苦しくて堪らない。夜、寝てからまで體の節々がいたむ。翌日は又いたむ體で、大きな外國人の間に交つて烈い労働を強ひられる。しかし、止めるものか。彼は心中で叫んだ。これで止めたなら日本人の恥辱だ。併も、當時は丁度日露戰爭のすんだ頃で米國でも非常に日本の評判のよい時だつた。こんな事で日本人が見くびられてなるものか。苦しかつたが、我慢してやつた。我慢してやつてゐるうちに、段々なれて來た。そしてとう／＼二週間の后には向ふの人と同じ事がやれる様になつた。そうら日本人にもやれるのだ現に鮎川氏は之を數年間平氣で續けた。これはなぜかといふと、先きに斷つておいた通り別に腕力が強かつたわけではない。それで兎も角、偉大な體格の米人と對抗出來たのは日本人は手先が敏活に働き、體を動かすところがうまいからである。と鮎川氏は説明する。そこで彼が故國に歸つて、いよく戸畑に工場を設立した時、ずるずるべつたりで不平ば

かり言ふ經驗者を一切使はずに山出しの百姓を職工に採用した。そして自分が先に立つて教へ込み、遂に米國の工場と同じ能率を上げ得る様になつたのである。之は實に彼の職工時代の實習によつて體驗した「日本人でも外國人だけきつとやれる。」といふ貴い強い確信のたまものである。

又横濱のフォード自動車工場にも實例がある。ここは米國の本社から部分品が送つて來るので、これを組み立てる工場なのである。こんな工場が世界至る處にある。勿論米國にも澤山ある。そこで横濱で組立てる工数は他國のに比してどうであつたらうか。始めは無論なれてゐなくて下手だから人數がいつた。此の工場の費用は殆んど全部組立ての事だから工費が大部分で材料費はいふに足らぬ。これで工數さへはぶければ、自動車の値段は安くなる。ところが、一年后には米國と同じ工數で出来る様になつた。其后又成績がよくなつて二割だけ工數が減じたといふ事である。此れは特に日本人向きの仕事であるからでもあるが、外國人と同等以上に能率を上げた例である。

こんな事から推して見ても工業立國には日本人はすこぶる適してゐる事がわかる。外國人に劣る事はないのである。

そこで我々の造船業の費用が高くつくといふ問題も、これから注意してやれば必ず船價を減らす事が出来る。今春、長崎で浦賀船渠の社長で造船協會の會長であつた今岡純一郎氏に會つた時、氏も、日本だつてきつと外國と競争出来る様になると語つて居た。自分も今の工數は必ず減じ得ると思ふ。現に去年の造船協會の會報に報告されてゐる様に畑氏は佐世保で研究して工數を非常に減す事に成功した。こんな偉い仕事が続々とあらはねばならぬ。その智識としての素地は學校で教はる事のみな

らず、これから先世の中で段々覚えていかなばならぬが、大切な基礎となるのは實習である。休暇を一ヶ月つぶされて惜しい様だけれ共、後に又一ヶ月の休みがあるのだから、充分休養の時間はある。だから始めの一ヶ月は大いに勵んでもらひたい。諸君の先輩は非常な苦心の末に日本の造船業をこゝまで完成してくれた。もう日本は技術に於ては外國に追ひついた。どんなものだつて、外國で出来る物なら日本でも出来る。今度は之を安價に作るといふ事が先輩の遺業をつく吾々の務めである。今一度云う。實習においてその素地をつくれ。そうしてロスキーのいはゆる「嚴肅なる規律」の修養をつめ。その意味に於て實習は偉大なる効果を持つと言ふ事を確信して今度の實習に出發されん事を望む。

附記

此の文は昭和四年七月六日實習出發コンパに於て野中先生が今や一夏の實習に別れて出でんとする學生達の爲に話して下さつた事を概略筆記したものである。

二 九州帝国大学工学部造船学科教授を退官しての回想

(第十三号、一九三五年二月)

「回顧十年待望×年」

野中季雄

私が二十有五年の海軍勤務を去つて九大教授に任せられ福岡の地に第一歩を下したのは大正十三年の一月であつた。その日はみぞれ降る寒い陰鬱な福岡特有のいやな天候でよき印象ではなかつた。

私も人並に多少の抱負を以て大學へ赴任した。爾來駑馬に鞭打て勤めては見たものゝ菲才何の爲すなく、失敗は多く功は少なく多くの人々の期待にも添ひ得ず、烏免句に歲月は人を待たず昭和九年五月職を退く事となつた。願れば十年一昔夢と過ぎ去りて只恥かしき次第である。私が赴任した時は造船教室は開講後二年有餘、まだ實驗設備等殆んどなく、これからと云ふ仕事も可なり多い時代であつた。第一回卒業生もあと僅か三ヶ月で學校を出でられる時で、僅か數回の特別講義で第一回卒業の諸君とは御馴染が出来た。爾後本年の第十一回に至る迄、合計九十一名の卒業生諸君を社會へ送り出した。此等の諸兄を通じて幾分なりと自分は社會との結び付きが深められた心地がして喜びに堪へぬ。

私は退職以來住馴れて見れば朗らかな氣持する福岡の地で草花を友として悠々自適呑氣な生活を送つて居る。數學の教ゆる所ではxは○からまでであるが、私のx年は一長かれと祈るxではあるが○に近き數年ならんかと思ふ。されば私としては、私と幾分の結び付きある卒業生諸君が此のx年の間に活社會に奮斗努力せられ、世に貢獻せらるゝを見聞する事が、何としても大なる樂みである。私の過去十年間の職務がかゝる大なる期待を老年に持來した事は誠に有難き次第である。

私は最近に左の一文を受取つた。何とも言葉にはつくせぬ喜悅と満足を感じた。私の今後老の到るも忘れて待つものは、此の種の手紙を幾度も受取るだらう、又諸君が續々と名を擧げられ世に貢獻せらるゝ報に接するだらうとの期待x年である。

……

月日のたつのは本當に早いもので、此所に参りましてもう六ヶ月、二重底がやつと出來上つたと云ふ状態でございました軍艦鈴谷も、もう今

では立派な船の體型を備へて海上に浮んで居ります。始めて關係した船、わからぬながらも多少苦勞した始めての船と思ひますと本當に何とも云はれない懐しい氣持がして昨日など飽かず勇姿に見とれました。進水の翌日いつもの様に工廠の門を入つた時、今までの様に、船臺の上に鈴谷の姿がないので親兄弟に死れた様な淋しい氣持が致しました。

それでも始めての船の進水の時のあの感激を思ひますと、かう申上げますと先生にもきつと思出しになる事でしょうが、とうてい言葉を以て盡し得ない喜びを覺えます。

昨年浦賀での初霜の例もあり、又大鯨の進水式が非常に時間がかつて、心配されたと云ふ例もありますので、部長始め進水主任から、つまらぬ私等まで萬一の失敗もないとは信じて居りましたが、殊に今度は天皇陛下の御前で、而かも二十分以内にと云ふので、皆非常な意氣込で御座いました。例によりまして私は式臺進水掛で恐れ多くも

大元帥陛下のすぐ近くに居る事とて殊の外緊張して居りました。すべての作業は豫定より早くすらくと進みまして、いよいよ支綱切斷となりました。後の方で工廠長の足音がして、また靜かになりました。船の方を見て立つてゐる私には何も後の方の事はわかりませんが愈々切斷です。

思はず前方の「スリップゲージ」を見ると五、六耗の所を指して居ります。その瞬間「ゴーツ」と云ふ低い音と共に「ジューツ」と云ふ音が式臺から船の方へ走つて行きました。私の眼はかたづを呑んで「スリップ、ゲージ」に釘付になつて居ります。次の瞬間「スリップ、ゲージ」の針が勢よく兩舷共「グルツ」と廻りました。はつとして船の方に眼をやると暫くして靜かに動き出すのが見えました。

「ワーツ」と云ふ觀衆の聲と軍樂隊の「マーチ」を夢の中で聞いて居るやうな氣がして嬉しさのあまりぼんやりして久壽玉のわれるのも何もわかりませんでした。思はず眼頭があつくなるのを覺えたゞけで、觀衆の聲も滑り行く勇ましい姿も夢の中の夢の様な氣持で居ました。

かうして二十分の豫定の進水式が見事十三分で終ることが出来ました。途中からで、而も直接責任を持つて關係したのは只の一部分に過ぎませんでした。始めての船ですから此の時の感激は恐らく私の一生涯を通じて忘れ得ないものゝ一つでございます。

三 名譽教授となつた野中の業績を簡潔に紹介

(第十四号、一九三六年三月)

「九州帝國大學名譽教授海軍造船中將野中先生を迎ふるに當りて、先生の御鴻業の一端を思ふ」

野中先生には、昭和十年十月十二日、九州帝國大學名譽教授になられ、再び教室に御姿を親しく拜することが出来る様になりましたことは、衷心喜びに堪へないのであります。

野中先生には、

大正十三年一月九日、九州帝國大學教授に任せられ、工學部造船學科に勤務し、主として、造船第二講座(軍艦設計及艦裝)を擔當し、爾來實に滿十年有餘に亘りて其の職にあり、ただ單に教授として、其の擔當せる學科の研究及教授に熱心格勵したるのみならず、其の間新設日尚ほ

淺く、熊倉教授、小川助教の亡後を享けたる新設學科の確立に對し銳意苦心し、十年一日の如く同學科の中樞教授として、苦心畫策し、其の講義の内容を充實し、研究機關を整備し、進んでは夙に航空學の特別講義を設け、遂に昭和八年新に航空學講座を新設するに至るまで、努力するところ大に、また多數の優秀なる造船技術者を養成したるのみならず、其の内には十指を屈するに足る海軍造船官を養成し、ただに學識經驗のみならず、其の後進に對する人物の感化品性陶冶の上に於て功績顯著なり。且つ九州帝國大學評議員としても、また其他數回に亘りて、各種の委員として、よく其の職責を盡し、其の熱心と深慮とは學内諸般の事業に反映して同學の今日あるに關して寄與するところ蓋し尠からざるものあり。

之れ、實に、其の人物風格の高きこと、造船造船の専門學術に關する素養經驗の豊富なることによるは勿論なり。而して教授拜命以前の經歷功績としては、明治三十二年六月海軍中技士に任せられしより、大正十二年十二月に至る二十五年間帝國海軍にありて、日清戰役の極めて貴重なる造船術搖籃時代にありて、水雷艇建造の比較研究に當る、その成果は爾後の驅逐艦建造に對する貴重なる準備的基礎となるものなり。明治三十五年七月以降、滿三年間英國グリニツチ海軍大學に學びて、造船學、造船學の蘊奧を極めて歸朝し、三十八年より四十二年に至る間、海軍造船の中樞にありて銳意劃策し傍ら、東京帝國大學に講師として、其の新たな學識經驗を提げて、造船技術者の養成に當る。戰艦薩摩、巡洋戰艦鞍馬の艦裝設計、戰艦安藝、巡洋戰艦伊吹の設計變更、更らに進んで、河内、攝津、平戸、山風、海風等の基本計畫は實に、この間の主要なる功績にして殊に、山風級驅逐艦は日露戰役の經驗に基き、當時列強

海軍造艦術上未だ到達し得ざりし性能を發揮せしむることに苦心成功し、今日日本海軍が有する優秀驅逐艦の基礎を置きしものといふべきなり。四十二年、四十三年の交、横須賀工廠に出で、薩摩、鞍馬、河内の新造工事を監督し、續て四十三年より大正二年に至る間は、英國に出張し、監督官として巡洋戰艦金剛の建造を督し、帝國に造艦技術の上に多大の收穫をもたらし歸れるのみならず、此の際特に、苦心慘愴、海軍造艦技術發達の上にも多大の貢獻をなしたるは、隠れたる功績の一なり。斯くして歸朝再び艦政本部に於て榛名、霧島建造の監督に當り、歐洲大戰に際しては驅逐艦急造の必要に遭ひ、其の設計を主掌せり。

大正三年より大正十二年に至る九年間は、吳工廠造艦部長の職にあり、扶桑、長門、赤城の三戰艦、佛國注文の分を加へて、驅逐艦九隻、特務艦六隻、潜水艦十數隻の建造に關して精勵努力、殊に歐洲大戰の後を享けて海軍工廠に於ける事業は緊急一日の倫安を許さざるに拘らず、職工の激烈なる爭奪戰を惹起したり、しかも其の間に處し、よく其の所期の成果を擧げたるは、華府會議前後に於ける日本海軍現有勢力の上に多大の影響を有したる功績なり。吳造艦工場に於ける設備の完成も亦此の間に於ける埋没すべからざる功績にして、吳工廠の造艦力の今日ある蓋し、この遠大にして深慮ある計劃に負ふところ大なるものあり、且造艦部長(船以下同)の現職の儘、大戰直後の歐米を視察して、日本海軍爾後の造船方針に對して、貴重なる收穫をもたらし歸れり、造船部長の職にあること九年に及ぶ。一事に徴するも、其の適材が適所にありたるを證するに足るべく、しかもこの二十五年間の經驗を携へて、九州帝國大學教授に轉じ、育英の事に當りたるが故に、其の後の十年間に前掲の如く優秀なる造船官を養成して、國家の實力に貢獻するところ大なりしこと、もとより然るべ

きところなり。之を要するに、海軍在職二十四年間、九州帝國大學にある十年間を加へて、實に三十有餘年の長きに亘り、帝國海軍造艦術のために直接に間接に寄與貢獻するところ寔に多大にして、尚ほ將來其の深き經驗によるもの多々あるべしと考へらる。官にありて、終始一貫精勵格勤(マ)、師として親切懇篤、實に帝國大學の産みたる技術官として、其の經歷功績極めて顯著なり。

野中先生には、現在及將來、永く名譽教授として、造船學教室に深い教へと、御黨陶を給らんことを、赤心お願ひ申し上げるのであります。

(文責在委員)

野中季雄 奉職履歴(熊本県山鹿市立岩野小学校校長室所蔵「九州

帝大名譽教授元海軍造船中將工学博士野中季雄先生の経歴」から主要事項抜粋)

一八九九(明治三二)年 六月二九日

任海軍造船中技士、同日付補横須賀海軍造船廠造船科主幹

一九〇〇(明治三三)年 五月二四日

兼海軍機關學校教官

一九〇一(明治三四)年一〇月 一日

任海軍造船大技士、同日付免本職並兼職補舞鶴海軍造船廠造船科主幹

右横須賀海軍造船廠造船科勤務中主トシテ艦船修理並ニ水雷艇建造ニ従事ス

一九〇二(明治三五)年 七月二二日	免本職、同日付英国駐在被仰付		
	右舞鶴海軍造船廠造船科勤務中主トシテ工場設備艦船修理並ニ雜役船新造ニ従事ス		
一九〇五(明治三八)年 七月 六日	歸朝被仰付		
同 年一〇月二八日	英国駐在被免、同日付補海軍艦政本部出仕		
	右英国駐在中明治三五年一〇月一日「グリニツジ」海軍大学造船学科ニ入学同三八年六月三ヶ年課程卒業		
	「グリニツジ」大学在学中夏期三ヶ月間八「デボンポート」海軍工廠ニ於テ実地演習		
同 年二月一八日	東京帝国大学工科大学講師嘱託		
一九〇七(明治四〇)年 四月一八日	免本職補海軍艦政本部部員		
同 年 九月二八日	任海軍造船少監		
一九〇八(明治四一)年 九月二五日	免本職補第一艦隊附		
同 年一月一四日	免本職補海軍艦政本部部員		
一九〇九(明治四二)年 九月二五日	東京帝国大学工科大学講師解嘱		
同 年一月一三日	免本職補横須賀海軍工廠造船部員		
一九一九(大正八)年 六月一〇日	右艦政本部勤務中八主トシテ左記諸艦ノ計画ニ従事ス		
	戦艦 安芸、薩摩、河内、摂津		
	巡洋戦艦 伊吹、鞍馬		
	軽巡洋艦 平戸、矢矧、筑摩、淀、最上		
	駆逐艦 海風、山風		
一九二〇(明治四三)年 二月二九日	免本職補造船監督官、同日付英国出張被仰付		
	右横須賀海軍工廠造船部在勤中八主トシテ計画主任兼新造主任トシテ戦艦薩摩、巡戦鞍馬、艦装工事並ニ戦艦河内ノ船殼工事ニ従事ス		
同 年二月 一日	任海軍造船中監		
一九二三(大正二)年 八月二三日	歸朝被仰付		
同 年二月 一日	免本職補海軍艦政本部出仕兼海軍大学校教官		
	右造船監督官トシテ在英中八主トシテ巡戦金剛ノ建造監督ニ従事ス		
一九二四(大正三)年 二月 一日	任海軍造船大監、同日付免本職並兼職補呉海軍工廠造船部長		
	右艦政本部在勤中巡戦榛名、霧島、艦装並ニ駆逐艦ノ計画ニ従事ス		

欧米各国へ出張被仰付

現職ノ儘戦後ノ欧米視察トシテ七月出發主

トシテ欧州大戦中独海軍ニ於ケル軍艦潜水

艦ノ計画、建造ニ就キ調査シ其ノ他英、仏

伊、米諸国ノ官、私立造船所ヲ視察シ翌大

正九年六月帰朝

一九一九（大正八）年 六月二十八日

明治三二年勅令第三四四号学位令第二條ニ依

リ茲ニ工学博士ノ学位ヲ授ク

同 年 九月二日 海軍造船大佐ト改称

同 年 二月 一日 任海軍造船少将

一九三三（大正二二）年 八月一三日

免本職補海軍艦政本部出仕

右呉海軍工廠造船部長勤務中ノ主要工事八

戦艦扶桑、長門、巡戦赤城ヲ初メトシ特務

艦三隻駆逐艦七隻潜水艦一三隻ナリ

同 年 二月 一日

任海軍造船中將、同日付免本職待命被仰付

同 年 二月 五日 予備役被仰付

一九二四（大正二三）年 一月二日

任九州帝国大学教授、叙高等官一等

一九三四（昭和九）年 五月一六日 依願免本官

一九三五（昭和一〇）年 一〇月二二日

九州帝国大学名誉教授ノ名称ヲ授ク

一九三六（昭和一一）年 三月二六日 後備役編入

一九四一（昭和一六）年 三月二六日 退役被仰付

初期の『吾』各号の目次（転載一覽）

先にも触れたとおり、初期の『吾』は第一号と一五号が未発掘である。また第三号と六号の複写冊子には目次がない。また第二号に

ついては野中季雄が教授として赴任する前の号なので、私が注意を払わず複写を取らなかつたため、目次状況の報告ができないことを

お詫びする。

『吾』第四号（一九二四〔大正二三〕年二月）【目次】

去り行く親しい人々に饒して

強者……………ロック生

海と山……………佐藤博訳

孤獨？……………S・Y・

労働者たちを凝視して……………河野豊一

感想……………S・生

K君からの手紙……………Abuchan

愚感……………S・A生

美的生活（中）……………蒲池司郎

小さい團長……………S・生

是の日……………S・Y・

會の記事
（註・「會の記事」掲載最終頁末尾欄に、「ロック生 岩崎君、

S・生 坂田君、Anbuchan 中村君、S・A 安倍君、S・
Y 米山君」と各人名が記されている。）

『吾』第五号（一九二五「大正一四」年四月）【目次】

港を去り行く人々に	S・H生
小品二つ	中村英夫
鳥瞰圖	SATO
船の進化	R・T生
冬の或夜	C生
海濱小景	苦茶
世界は狭まる	SATO
大宰府にて	C生
B先生（或女の人の話）	C生
会の記事	

（註・この号は最後の六六頁に「雑誌の仕事を終る時」SAT
O」の文面上余白に、「C生……原田氏、苦茶……有馬氏、R・
T生……武田氏」との名が記されている。）

『吾』第七号（一九二八「昭和三」年七月）【目次】

實社會より	島田謙三	一
嗚呼後藤勇吉君	奈須仙吉	四
過去帳から	TARCH	九
思ひ出するまゝに	M M	一三
素破らしき青春	高木 寛	一七

學内記事	二六
會員消息	二七
本年度第一學期茶話會	二九

『吾』第八号（一九二九「昭和四」年二月）【目次】

一、寫 眞		
二、日本工業將來 <small>（の將來）</small> と吾人の覺悟	野中季雄教授述	一
三、空中推進器發達に就いて	カルマン教授講演	八
四、Lux-Rich System Fire Extinguisher に就いて	池田初次	二三
五、欲しいもの	島 謙	二七
六、一年間	井上哲夫	三〇
七、造船會日誌		三〇
八、横須賀行進曲	山口宗夫	三四
九、製図圖室から	在 濱 生	四〇
一〇、朝鮮旅行記	つるし柿	四四
一一、ジャズ音楽	原 田 實	四四
一二、浦賀から	豊福清民	四四
一三、川崎から	立川太郎	四五
一四、吾が國の海運と老齡船	高 勝治	五〇
一五、I先生と私と	逸見信夫	五七
一六、京阪丸	井上哲夫	五九
一七、會計報告		六一

一八、昨夏回顧録	奈須仙吉	六二
一九、卒業論文一覽		六三
二〇、淺羽先生を憶う	山口宗夫	六五
二一、會員消息		六八
二二、編輯室から		七〇

『吾』第九号（一九三二「昭和六」年三月）【目次】

所感二三	黒瀬圓次郎	（二）
準備科目制度小論	大澤 渡	（五）
工場風景	在濱 生	（八）
ワール物語	島 謙	（一二）
スフィンクスと桐	奈須仙吉	（一九）
ある新入學生の日記	山口宗夫	（二四）
公開 状	大澤 渡	（三一）
空輸時代	H 生	（四〇）
教室奮談會	オケラ・クラブ	（四六）
雪の函館から	大澤 渡	（五二）
造船會日誌		（五二）
會員消息		（五六）
會計報告	廣田良八郎	（五九）
會計後記		（六〇）
編輯を終へて		（六〇）

『吾』第一〇号（一九三二「昭和六」年二月）【目次】

若き従弟へ送る手紙	島 謙	一
新入生川柳日誌	谷田 明	七
大學の没落と就業問題	大澤 渡	一〇
見果てぬ夢	I 生	一八
或る 男	一カボチャ生	二四
造船卒業生は何處へ行くか	大澤 渡	二五
實習生等の日課	重 坊	三一
アパーチャー	H 生	三二
造船會日誌		三三
會員名簿		三五
基本金に就て		三五
會計報告		三七
（註・「重坊」と名のあるのは、野中季雄の子の野中重弥である。）		

『吾』第一一号（一九三二「昭和七」年二月）【目次】

表 紙	筑紫信夫	
發動艇「わかもと」附其の設計について	原田 親	一
二つの問題	島 謙	九
机上二片	中村英夫	一二
九州帝大航空會の働き	野村親雄	一六
家	加藤 啓	
七夜行状記	島 謙	三三
鬼ヶ島紀行	Y・G・M	三六
	川崎忠三郎	五〇

近世演習風景	TO M	五一
エキストラレポの実習生	谷田明	五五
造船會日誌		六五
會員名簿		六九
諸兄へのお願ひ		六九
會計報告		七〇
教室のこのころ		七一
卒業論文一覽		七五
編輯後記		七八

『吾』第二二号(一九三四「昭和九」年二月)【目次】	橋本賢輔	一
航空學講座の出来るまで	編者	四
標準學科課程表に付て	NAKAKEN	一四
植田さんと私	吉田隆	二一
ロボツト進軍	末竹靖彦	二七
半島雜記	川崎忠三郎	三二
水郷めぐり	中村英夫	三五
その事など	竹下靖彦	三七
或る日の午後		四四
屋島丸沈没事件座談會速記録	精神病者	四七
うわごと		四九
衛生相談	奈須仙吉	五〇
嬉しい事		五三
航空會日誌		五三

會員名簿		六〇
造船會會員一覽		六〇
會計報告		六四
先輩本年度御通信欄		六七
廣瀬先生記念品贈呈収支決算報告		七二
卒業論文一覽		七四
秋の試験問題		七七
編輯後記		八二

『吾』第二三号(一九三五「昭和一〇」年二月)【目次】	松岡康光畫	
表紙畫「非常時」	野中季雄	一
回顧十年待望×年	T Y M	三
偶感とところどころ	上野敬三	七
工場生活の思出	谷田明	一四
「吾」十二號編輯當時を回顧して	谷田明	一八
舊作	清濁併吞生	一九
秋より冬へ	仙登鬼	二〇
近作十五題	吉田巍	二一
試運轉	三人中の一人	二八
三人旅日記	川崎忠三郎	三三
久住高原日記		三三
造船會日記		四八
會員名簿		四八
會計報告		四八

本年度卒業論文及卒業設計豫定……………四九

教室の此頃……………五〇

編輯後記……………五四

『吾』第一四号（一九三六〔昭和一一〕年三月）【目次】

巻頭の辭……………一

わが子へ……………三

精鋭なる支那陸海軍……………二

渡滿隨感……………二〇

大連近況……………二七

漱石の坊ツちゃんと語る……………三二

ペンにまかせて……………三六

湘南の一角にて……………四八

近況お知らせ……………五二

思ひ出すまゝ……………五四

籠鳥抄……………五七

醉狂獨語……………七〇

山陽道藤栗毛……………七四

雜吟……………八五

『グライダー』の面白味……………八七

九州帝大航空會の大阿蘇に於ける帆走實驗……………九〇

大阿蘇に於ける合宿生活の思ひ出……………九七

造船學教室第十五周年に際して……………一〇三

九州帝國大學名譽教授海軍造船中將野中先生を迎ふるに當りて……………

先生の御鴻業の一端を思ふ……………一〇六

『吾』創立十五周年記念號刊行に就いて 昭和十年度 雜誌委員……………一〇九

學校最近の有様……………一一三

先輩通信……………一二一

造船會日記……………一二九

昭和十年度造船會々計報告……………一四四

會員名簿……………一四五

あとがき……………一五三

（註・筆名について「あとがき」で記されているのは、次のとおりである。「ナタナヘル 橋本賢輔先生、T・NOM 野村親

雄兄、YAMマ 山口宗夫兄、唾鷲熊襲一 久芳祥一兄、オート

チャイ郎 横尾孝義兄」の各人名となっている。）

『吾』第一六号（一九三八〔昭和一三年四月）【目次】

寫眞……………

巻頭の辭……………渡邊恵弘……………（一）

故山川麒一郎先生送葬次第……………（三）

山川先生御遺稿……………（一一）

就任の御挨拶……………河東卓四郎……………（一七）

有田先生の寫眞についての辭……………山川麒一郎……………（二八）

滿洲視察談……………渡邊恵弘……………（二二）

三巨人に仕へて大希望二つ……………奈須仙吉……………（二六）

朝鮮の海軍法令……………末竹靖彦……………（三三）

ペンにまかせて……………橋本公平……………（三八）

九州を縦に行くの記	ピ ン 公	(四五)
空	和佐田航一	(五八)
PROMENADE	矜 羯 羅	(六一)
先輩のお頼り	(二編)	(六六)
造船會日誌		(六九)
航空會日誌		(七四)
有田先生記念品贈呈會計報告		(八〇)
會計報告		(八二)
會員名簿		(八三)
編輯後記		(九四)

(註・この号の筆名は「編輯後記」で次のとおりとされている。
「橋本生 橋本公平、ピン公 大園政幸、矜羯羅 北村源三」と。

〔参考文献〕

- 九州帝国大学造船会(九州大学造船会)『吾』第三号(一九三三年六月)、第四号(一九三四年二月)、第五号(一九三五年四月)、第六号(一九三六年二月)、第七号(一九三八年七月)、第八号(一九三九年二月)、第九号(一九三九年三月)、第一〇号(一九三九年十一月)、第一号(一九三九年十二月)、第二号(一九三四年二月)、第十三号(一九三五年一月)、第十四号(一九三六年三月)、第一六号(一九三八年四月)、第三二号(一九三六年三月)、第六〇号(一九三五年一月)
海軍歴史保存会編集『日本海軍史 第三巻・通史 第四編』(第一法規出版、一九九五年)

海軍有終会『海軍有終会會員名簿』(一九四二年)、同(一九四三年)
奈倉文二、横井勝彦編著『日英兵器産業史——武器移転の経済史的研究』(日本経済評論社、二〇〇五年)

畑野勇『近代日本の軍産学複合体——海軍・重工業界・大学』(創文社、二〇〇五年)

福川秀樹編著『日本海軍将官辞典』(芙蓉書房、二〇〇〇年)

防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 大本営海軍部・連合艦隊 一』(朝雲新聞社、一九七五年)

前間孝則『戦艦大和誕生(上・下)』(講談社、一九九九年)

寺谷武明『NBC呉造船所の設立——真藤恒を中心として』(森川英正・由井常彦編『国際比較・国際関係の経営史』名古屋大学出版会、一九九七年)

所収)

友田政就『郷土の異色ある人物』(鹿北町文化協会編『あやすぎ』一九九八年)

所収特別寄稿)

山本善之『平賀讓先生を考える三』の「六、実船による抵抗実験」(関西造船協会『らん』第三九号「一九九八年四月」所収)

注

(1) 畑野勇『近代日本の軍産学複合体——海軍・重工業界・大学』(二〇〇五年)、三頁『近代日本における造船を主とする海軍・造船業・大学の三者結合を、軍産学複合体の典型的な歴史的事例としてとらえる。そして、その歴史的展開の追跡において、近代日本の軍産学複合体を一身に体現した人物として、平賀讓という軍事技術者に焦点を当てることとする。』

(2) ちなみに野中の卒業論文は、『Structural Strength & Specification of First Class Battleship』であった。一八九九年六月に東京帝国大学工科大学に提出されている。

- (3) 山本善之「平賀讓先生を考える 三」の「六、実船による抵抗実験」文中（関西造船協会『らん』第三九号「一九九八年四月」、三九頁）参照。
- (4) 以上、前間孝則『戦艦大和誕生（上）』（一九九九年）、序章「海軍造船に西島あり」、および第一章「海軍造船大尉西島亮二の誕生」参照。
- (5) 森川英正・由井常彦編『国際比較・国際関係の経営史』（一九九七年）所収。
- (6) 以上、岩崎正英「吾」の名の由来について」（九州大学造船会発行『吾』第三一号「一九五六年三月」所収、一三〜一四頁参照）。
- (7) 奈倉文二・横井勝彦編著『日英兵器産業史——武器移転の経済史的研究』（二〇〇五年）、一四五頁（小野塚知二、第三章「日英間武器移転の技術的側面——金剛建造期の意味」文中）参照。
- (8) 防衛庁防衛研究所戦史室『戦史叢書 大本営海軍部・連合艦隊 一』（一九七五年）、一九一頁参照。
- (9) 以上、海軍歴史保存会編集『日本海軍史 第三巻・通史 第四編』（一九九五年）、六八頁他参照。
- (10) 野中の縁者（甥の次男）である友田政就氏への、二〇〇二年七月二〇日の聞き取りによる。
- (11) 以上、友田政就「郷土の異色ある人物」文中参照（鹿北町文化協会編『あやすぎ』一九九八年、一〇頁）。